

引導法語（卍山道白）

浮雲起滅在風前
幻化空身四十年
江上曲終人不見
白鷗湮沒水連天

頌
五言絕句
七言絕句

恭惟 月海玄秋居士

戒名

繡東魯卷 參西來禪

八字稱

正法眼破砂盆 何必說妙
清淨佛乾屎橛 切忌認玄
炉中雪点没蹤迹
水上胡蘆絕蓋纏
月華吟遊 囊底有三千首
工夫放下 手裡無半文錢
奉佛誠悃至 護法願力堅
上來總是平日受用 即今如何錢錦旋

腹
四六文
古詩
散文

咄

一字関
喝
露
参

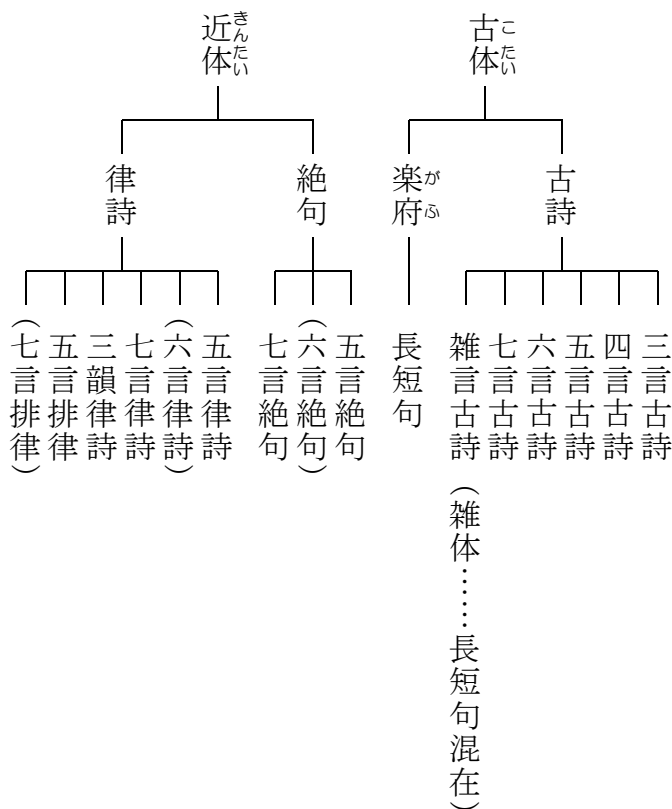
寸心無疑事
所向非徒然

脚
絶句の転句
と
結句の二句

目次

一、頌	1	五言絶句の平仄式	16	重隔句	35
漢詩の形と種類	2	七言絶句の平仄式	17	疎隔句	36
漢詩の変遷	3	漢詩の構造	18	密隔句	37
七言絶句の例	4	練習 五言・七言絶句	19	平隔句	38
楓橋夜泊	5	練習 五言絶句	20	雜隔句	39
張繼	6	練習 七言絶句	21	禪門四六文の	40
漢字の特質	7	内容	22	基本的な平仄法	41
四声	8	対比	23	四六文本来の	42
現代北京語の四声	9	三法五要	24	基本的な平仄法	43
韻の分類	10	頌の五法	25	疏の四六文の	44
古詩	11	起承転結	26	基本的な平仄法	45
押韻(慣習)	12	字眼	27	引導法語での四六文の	46
隔句韻	13	二、戒名	28	基本的な平仄法	47
毎句韻	14	成り立ち	29	高祖承陽大師	48
換韻格	15	系字	30	五百五十回大遠忌疏	49
一韻到底格	16	三、八字称	31	高祖承陽大師	50
四言四句のきまり	17	四、腹	32	七百五十回大遠忌疏	51
四言四句の作例	18	腹の例	33	法語の四	52
山門法語	19	四六十三法	34	腹のきまり	53
佛殿法語	20	独句四製	35	四六文の特徵	54
開山堂法語	21	発句	36	対句の要件	55
遺偈	22	傍句	37	五、一字関	56
祖師遺偈	23	漫句	38	六、脚	57
練習 四言四句	24	送句	39	練習 引導法語	58
練習 四言四句で	25	短対三製	40	七、詩の八病(参考)	59
遺偈をつくる	26	壮句	41	八、拗体(参考)	60
近体詩のきまり	27	緊句	42	九、連声	61
近体詩	28	長句	43	十、連濁	62
	29	隔対六製	44	十一、参考文献	63
	30	輕隔句	45	(作詩関連書籍)の紹介	64
	31		46		65
	32		47		66
	33		48		67
	34		49		68
	35		50		69
	36		51		70
	37		52		71
	38		53		72
	39		54		73
	40		55		74
	41		56		75
	42		57		76
	43		58		77
	44		59		78
	45		60		79
	46		61		80
	47		62		81
	48		63		82
	49		64		83
	50		65		84
	51		66		85
	52		67		86
	53		68		87
	54		69		88
	55		70		89
	56		71		90
	57		72		91
	58		73		92
	59		74		93
	60		75		94
	61		76		95
	62		77		96
	63		78		97
	64		79		98
	65		80		99
	66		81		100

漢詩の形と種類



古詩は詩經（毛詩）楚辭、樂府、六朝時代の古い形式の詩、又は六朝以後の作品でも、古体の形式を擬した詩編などを云う。一句の文字数で分類すれば、三言詩、四言詩、五言詩、六言詩、七言詩、雜言（三言から八言ぐらゐまで混ざっている）と有り、句の数では四句以上、大抵は偶数句で相当長い作品があり、長い作品（十句以上）を殊に長句と呼んでいるが、七言古詩で白樂天が詠む「長恨歌」は百二十句で、楚辭における「離騷」や「天問」などは三百七十五句の長きに及んでいる。

參 中国詩人選集別卷「唐詩概説」

小川環樹著 岩波書店

【偈頌】 仏の徳をたたえる詩。偈。

梵語の音訳である偈と、その意訳である頌との複合語。

【頌】 ①「詩經」のジャンルを風・雅・頌にわけたうちのひとつ。祭礼のとき、祖先の徳をたたえる歌のこと。▽一説に、容（容姿、振る舞い）に通じ、舞踊をともなった歌であるともいう。国別にわけて、魯頌・周頌・商頌の三種がある。

「頌者美盛徳之形容、以其成功、告於神明者也」頌トハ盛徳ノ形容ヲ美シ、ソノ成功ヲモツテ、神明ニ告グル者ナリ（「詩經」）

② 文体の一つ。功績や人がらをたたえるもの。「伯夷頌」「酒徳頌」

③ 仏徳を賛美した教理を説く詩。

「偈頌」

漢詩の変遷

周	秦	漢	晋	南北朝	隋	唐
前四六三 三八三	積尊出生 積尊入滅	後一五〇 龍樹尊者生	四一三 四二七 五一三	鳩摩羅什寂 陶淵明没 沈約没	五三六 五九二 五九七 六〇六	六五一 六七三 七一三
				達磨大師寂 慧可大師寂 天台智顗寂 三祖大師寂	四祖大師寂 五祖大師寂 六祖大師寂	永嘉玄覺寂 青原行思寂 南岳懷讓寂
	『詩經』 (四言)	『楚辭』		『文選』	『科挙』制度 【信心銘】⇨五言が主	【證道歌】
					⇨七言發生	
						王維没 李白没 杜甫没 馬祖道一寂 石頭希遷寂
						『科挙』の普及 【参同契】

古詩 ←→ 近体詩

周(紀元前一〇四六年頃、紀元前一五六年)

秦(?、紀元前一〇六年)

前漢(紀元前一〇六年、八年)
後漢(三五年、三〇年)

南北朝時代(四三九年、五八九年)

隋(五八一年、六一九年)
唐(六八一年、九〇七年)

七言絶句の例

楓橋夜泊 張繼

月落烏啼霜滿天
江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺
夜半鐘聲到客船

楓橋夜泊 張繼

月落^{つきお}ち烏^{からす}啼^ないて、霜^{しも}天^{てん}に満^みつ
江^{こう}楓^{ふう}漁^{ぎょ}火^か、愁^{しゅう}眠^{みん}に對^{たい}す
姑^こ蘇^そ城^{じょう}外^{がい}（の）寒^{かん}山^{さん}寺^じ
夜^{やはん}半^{はん}の鐘^{しょう}聲^{せい}、客^{かく}船^{せん}に到^{いた}る

《語訳》

月は沈み烏が啼き、霜の気配が天に満ちている。河辺の楓の葉と、ちらちらとしたいさり火が、旅の夜の寝付かれぬ眼にうつる。時に、姑蘇の町外れの寒山寺から夜半を告げる鐘の音が、自分の寝ている船に響いてきた。

【張繼】（生没年不詳）襄州の人。字は懿孫。盛唐の詩人。

天寶十二載（七五三）の進士。はじめは節度使の幕僚などをつとめていたが、後に中央に呼ばれ、檢校祠郎中に至った。

【楓橋夜泊】江蘇省蘇州の運河にかかる太鼓形の石橋の下に舟やどりをしたときの詩。

【月落烏啼】夜半に月が西の山に落ちて烏が啼いている。しかし烏は夜啼かないとか、いろいろな説がある。

【霜滿天】霜のおりる気配が天空に満ちる。

【江楓】川辺の楓の樹。

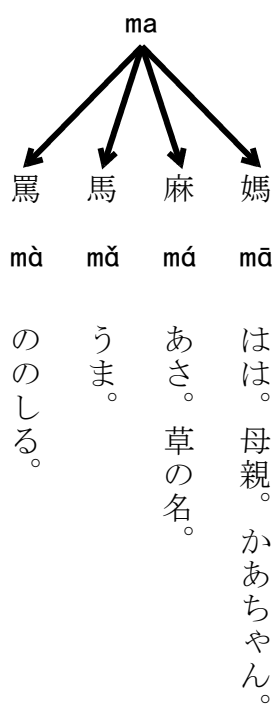
【對愁眠】旅愁のためにまどろんだり目が覚めたりする浅い眠りのために、眠れない目に情景が浮かぶ。

【姑蘇（蘇州）の寒山寺】蘇州市の西郊外にある。門前には小運河が流れ、太鼓橋の下を小舟が通るのどかな雰囲気だが、当時このあたりは商業の中心地で、昼夜の別なく船が行き交っていた。門を入るとすぐ、「楓橋夜泊」と寒山拾得の石碑がり、その拓本が人気を呼んでいる。六朝時代（二二〇～五八九）に創建されたといわれるが、太平天国の乱で焼失、現存の堂宇は清朝末期に建てられたもの。

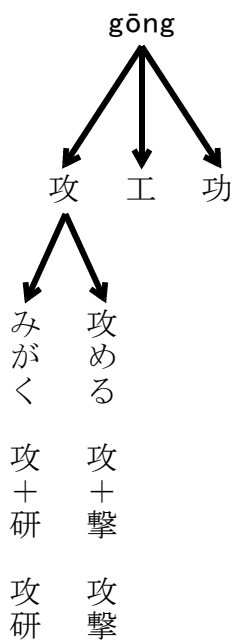
漢字の特質

- 一字一音節一意

- ・同じ音でもアクセントによつて文字が異なる（意味が異なる）



- ・ 全く同じ音でも文字が異なる（意味が異なる）



一文字では、意味に誤解が生じやすい

一字と一字を連結して意味をより明確にする（限定する）

一字と二字が結びついて、二字二音による複合語を基本単位とする

四声

沈約（晋代）が漢字を音韻学的に平声上声去声入声の四声に分類。現在漢詩で使用されているものは、平水韻とよばれる。

【圈発】「平上去入」を図示したもの

平字

平声

天○

先

声が平らか

子●

紙

声が尻上がり

聖●

敬

声が尻下がりに去ってしまう

哲●

屑

声がつまって、語尾が中に入ってしまう（フツクチキ）
歴史的仮名づかいで、二字以上の仮名で表され末尾にフツクチキがくるものはすべて入声

《例》「十」ジフ、「合」ゴフ、
「法」ホフ

平字
仄字

○で表す
●で表す

【沈約】 四四一〇五一三
南北朝時代、梁の学者。武康（浙江省徳清県）の人。字は休文。博学で、『宋書』『梁武紀』などを編集。著に音韻学の研究書『四声譜』がある。また、詩文にも巧みであった。

【圈発】 漢字の四声を示すために字の四すみにつける点。

平声 ひようせい・ひようしよう
上声 じようせい・じようしよう
去声 きよせい・きよしよう
入声 にゅうせい・につしよう

獨

日本語では **doku** だが、中国語では **du** で一音。

同じ **du** でも音の上下によつて意味が異なる。
現代北京語では次のようになる。

都

虞

dū

平声 声が平らか

賭

麌

dǔ

上声 声が少し下がって少し上がる

度

遇

dù

去声 声が尻下がり

獨

屋

dú

平声 声が尻上がり

現代北京語では、**dū dú** の二種類の声調が平声、平水韻の入声は平上去声の何処かに属する。現代北京語から平水韻の平仄を探るに、上声、去声は何れも仄字、平声の中で「フクツチキ」は入声で仄字、それ以外は平声で平字である。

フクツチキ…それぞれ末尾が、**-k**・**-t**・**-p**で表される。

韻の分類

四声
一〇六韻

通韻		通韻		通韻		通韻		通韻		通韻		通韻		通韻	
15 14 13 12	11 10 9 8 7	6 5 4 3 2	1 15 14 13 12 11	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	3 2 1	平聲									
咸 塩 覃 侵	尤 蒸 青 庚 陽	麻 歌 豪 肴 蕭	先 刪 寒 元 文 真	灰 佳 齊 虞 魚 微 支 江 冬 東											
29 28 27 26	25 24 23 22 21 20	19 18 17 16 15 14 13 12 11	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	賄 蟹 齊 慶 語 尾 紙 講 腫 董	3 2 1	上聲									
賺 琰 感 寢	有 迴 梗 養 馬 哿	皓 巧 篠 銑 濟 旱 阮 吻 軫													
30 29 28 27	26 25 24 23 22 21	20 19 18 17 16 15 14 13 12	11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	隊 卦 泰 霽 遇 御 未 寘 絳 宋 送	3 2 1	去聲									
陷 艷 勘 沁	宥 徑 敬 漾 禡 箇	号 効 嘯 霰 諫 翰 願 問 震													
17 16 15 14	13 12 11 10	9 8 7 6 5 4	屑 黠 曷 月 物 質		3 2 1	入聲									
洽 葉 合 緝	職 錫 陌 藥				覺 沃 屋										

通韻
近体詩では認められないが、古詩では、上記のように複数の韻のグループを用いて押韻することができる。

「上平声」

〔一東、二冬、三江〕

〔四支、五微、八齊、九佳、十灰〕

〔六魚、七虞〕

〔十一真、十二文、十三元、十四寒、十五刪、一先（下平声）〕

「下平声」

〔二蕭、三肴、四豪〕

〔五歌、六麻〕

〔七陽〕

〔八庚、九青、十蒸〕

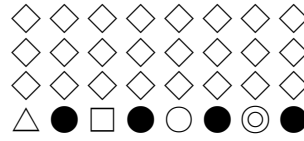
〔十一尤〕

〔十二侵、十三覃、十四塩、十五咸〕

押韻（慣習）

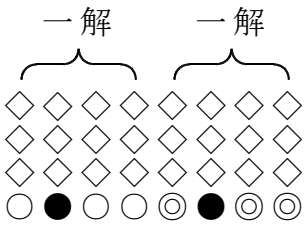
隔句韻

押韻箇所、偶数番目の句
（二、四、六、…句）



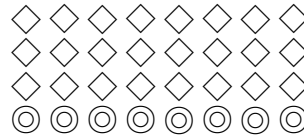
換韻格

四句を一解とし、
一解毎に韻を換える



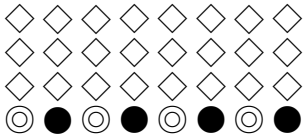
毎句韻

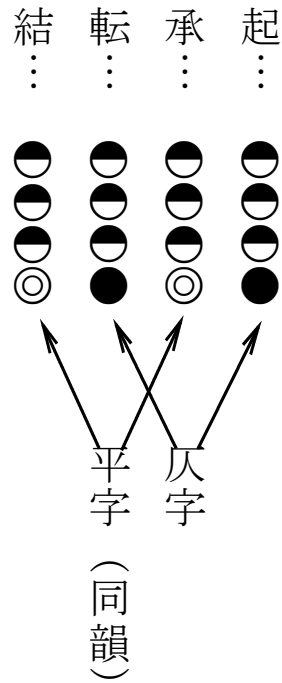
押韻箇所、全部の句



一韻到底格

全体を一つの韻で通したもの





老僧九十●

言端語端◎
(上平十四寒)

末後無句●

月白風寒◎
(上平十四寒)

- ①第二句、第四句の句末に韻を押む
②第一句、第三句の句末は仄字

各句とも下一字のみ注意。上三文字の平仄は問わない。
現代洞門では、遺偈や晋山式の山門法語等でこの四言四句
(古詩)の形が最も多く使用される。

(韻が仄字の場合)

△△△○

△△△◎

△△△○

△△△◎

すだち
寒し

(西有穆山禪師遺偈)

四言四句の作例

山門法語

一、山門について
一、住職としての第一声

密密移歩・
密密、歩を移し

渡水看花・
水を渡り、花を見る

春風一路・
春風一路

不覺到家・
覺えず、家に到る

佛殿法語

一、釈尊について
一、初相見の挨拶

悉有佛性・
悉有佛性

瓦礫蝦蟆・
瓦礫^{がひやく}蝦蟆^{がま}

塵塵刹刹・
塵塵刹刹

又復何加・
又^{またまた}復、何をか加えん

承結の末尾は下平六麻の韻。

（秦慧玉禪師中央寺晋山）

承結の末尾は下平六麻の韻。

（秦慧玉禪師中央寺晋山）

開山堂法語

一、開山大和尚について
一、歴住に連なることへの感謝

聯芳諸嶽・
芳を諸嶽に聯ね

續焰妙高・
焰を妙高に続く

雄峰一滴・
雄峰一滴

天下滔滔・
天下滔滔たり

遺偈

臨終に際してその境地を偈にしたもの。(正月に作る風あり)
四言四句のものが多く、普通には第二第四句に韻を押む。
末期の一偈故に平仄は不問。

任運日月・
任運日月

隨縁誑人・
縁に隨て人を誑す

眞如不昧・
眞如不昧

行脚永新・
行脚永に新なり

承結の末尾は下平四豪の韻。

(石川素童禪師最乗寺晋山)

承結の末尾は上平十一眞の韻。

(余語翠巖老師遺偈)

祖師遺偈

道元禪師

懷辨禪師

義介禪師

瑩山禪師

五十四年

八十三年如夢幻

七顛八倒

自耕自作閑田地

照第一天

一生罪犯覆彌天

九十一

幾度賣來買去新

打箇踣跳

而今足下無絲去

蘆花覆雪

無限靈苗種熟脫

觸破大千

蹈翻虛空沒地泉

午夜月圓

法堂上見挿鋤人

噴

渾身無覓

活陷黃泉

練習

四言四句

四言四句の古詩をバラバラにしてみました。
正しく並び換えてください。

A 仰高鑽堅

B 宏大無辺

C 這箇功德

D 佛祖骨髓

練習

四言四句で遺偈を作る

①『年』を用いて作る。(一先の韻)

●	●	●	●
●	●	●	●
●	●	●	●
◎	●	◎	●

①一先の韻以外で作る。

●	●	●	●
●	●	●	●
●	●	●	●
◎	●	◎	●

結句	轉句	承句	起句	
●	○	●	○	1
○	●	●	○	2
○	●	○	●	3
●	○	○	●	4
●	○	●	●	5
○	●	●	○	6
◎	●	◎	◎	7

白●	江○	幻●	浮○
鷗○	上●	化●	雲○
湮○	曲●	空○	起●
沒●	終○	身○	滅●
水●	人○	四●	在●
連○	不●	十●	風○
天◎	見●	年◎	前◎

- ① 脚韻を踏む
起句（七言）、承句、結句の句末に同韻を踏む
粘法を守る
- ② 各句の二字目が○●●○又は●○○●
二四不同二六対（一三五不論）
二四不同
- ③ 各句において、二字目と四字目の平仄が異なる
二六対
- ④ 各句において、二字目と六字目の平仄は同じ
孤平、孤仄の禁止
七言絶句の四字目の孤平を避ける
五言絶句の二字目の孤平を避ける
下三連を不許
- ⑤ 5・6・7を○○○又は●●●としない
平頭、仄頭の禁止
- ⑥ 各句の句頭が全て平字、又は全て仄字としない
冒韻を避ける
- ⑦ 句末以外に脚韻と同じ韻の文字を使用しない
同字の重出は不可
- ⑧ 一詩の中で同じ字を二度使つてはならない。
また、「日日」「凛凛」等は「疊字」と言い同字重出にはならず。
さらに、不□不□□□□のように一句の中に同じ字が使われる場合があるが、これも同字重出とはならず。

P 12

「這箇功德 廣大無辺
佛祖骨髓 仰高鑽堅」
「這箇の功德、廣大無辺、佛祖
の骨髓、仰げば高く鑽れば堅し」
秋野孝道禪師、開光法語（袈裟）

「返読の規則」

「ヲ・ニ・ヨリ・ト・ラルにあ
つたら返れ」
坐静 静かニ坐す（誤り）
望遥 遥かニ望む（誤り）
の場合の「ニ」は、「ヲ・ニ」
の「ニ」とは異なる。すなわち、
「ヲ・ニ」は格助詞で、「静か
ニ」の「ニ」は形容動詞の活用
語尾になっている。
そのため先の例は、
静坐 静かに坐す
望望 遥かに望む

※ ×「日々」「凛々」

五言絶句の平仄式

仄起式（正格、起句第二文字目が仄字）

起句 ▲●△○●

承句 △○▲●◎

転句 △○●●●

結句 ▲●●○◎

平起式（偏格、起句第二文字目が平字）

起句 △○●●●

承句 ▲●●○◎

転句 ▲●△○●

結句 △○▲●◎

※起句…^{ふみおとし}押落が多い

七言絶句の平仄式

平起式（正格、起句第二文字目が平字）

起句

△ ○ △ △ ● ● ○ ◎

承句

▲ ● △ ○ ▲ ● ◎

転句

▲ ● △ ○ ● ● ●

結句

△ ○ ▲ ● ● ○ ◎

仄起式（偏格、起句第二文字目が仄字）

起句

▲ ● △ ○ ▲ ● ◎

承句

△ ○ ▲ ● ● ○ ◎

転句

△ ○ ▲ ● △ ○ ●

結句

▲ ● △ ○ ▲ ● ◎

漢詩の構造

月落烏啼霜滿天
江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺
夜半鐘聲到客船

七言は「二字と二字と三字」、五言は「二字と三字」で構成される。

發達の経過から見ると、詩經の作品は初めは二字句、次には四字句。次にリズムの轉換性を持たせて三字句が現れ、次に二字句と三字句を組み合わせた五言詩が現れた。次に四字句と三字句を組み合わせた七言詩が現れた。

詩詞の文字構造は概ね次の通り。

2 字句 2

3 字句 2 + 1 1 + 2

4 字句 1 + 3 2 + 2 3 + 1

5 字句 2 + 3 (2 + 1 又は 1 + 2)

6 字句 2 + 2 + 2 (3 + 3 ではない)

7 字句 4 + 3 (4 字と 3 字の各組み合わせを翻用)

偶数字句は 2 字若しくは 4 字を最小単位とする。

奇数字句は 3 字 + 偶数字句とする。

練習

五言絶句・七言絶句

五言絶句をバラバラにしてみました。
正しく並び換えてください。

A 黄河入海流

B 欲穷千里目

C 白日依山盡

D 更上一层楼

七言絶句をバラバラにしてみました。
正しく並び換えてください。

A 兩岸猿聲啼不盡

B 朝辭白帝彩雲間

C 輕舟已過萬重山

D 千里江陵一日還

練習

五言絶句

五言絶句をバラバラにしてみました。正しく並び換えてください。

◎	●	◎	●

縁愁 不知 何處 白髮 三千丈 似個長 得秋霜 明鏡裏

練習

七言絶句

七言絶句をバラバラにしてみました。正しく並び換えてください。

◎	●	◎	◎

对愁眠

霜满天

到客船

寒山寺

渔火
月落

姑苏
夜半

城外
乌啼

钟声
江枫

内容（意味内容の上での約束ごと）

対比

主観	如	剛	古	陰	事	心	虚	情
	⇄	⇄	⇄	⇄	⇄	⇄	⇄	⇄
客観	是	柔	今	陽	理	物	実	景

三法五要

⑤	④	③	②	①
奠	哀	活	死	仁
	哀	生前	死去	故人
懇ろにまつる	しみ	の	の	の
		消息		徳
			└─┬─┘	
			三法	

頌の五法

- ① 戒名の意味の拈提
- ② 生前の経歴、徳行
- ③ 宗乗
- ④ 故人に因縁のある古則公案の拈提
- ⑤ 比喻を引く

起承転結

起…京都三条 糸屋の娘
承…姉は十八 妹は十六
転…諸国大名は弓矢で殺す
結…糸屋の娘は目で殺す

起…書き出し、詩意を提起

承…起句を承けて、更に展開

転…起承句の詩意を一転

（変化をつける、印象を変える、別の視点から描いてみる）
結…全体を結ぶ

字眼

そのできばえのきめてとなる最も重要な文字

七言絶句・・・第五字目
五言絶句・・・第三字目

《例》
渡歳華 ●●○

渡のところにどの文字（遷・移・経・歴）を用いるかによって、詩全体の雰囲気が変わってしまう。

【頼山陽】
（ういさんよう）

（一七八〇～一八三二）

江戸時代末期の儒学者・歴史家。安芸（広島県）の人。名は襄、字は子成、山陽は号。春水の子。柴野栗山に朱子学を、尾藤二洲に日本史を学び、梁川星巖・大塩平八郎らと交わった。詩文にすぐれ、『日本外史』『山陽詩鈔』『日本政記』などの著作は、幕末の尊王攘夷派の志士に大きな影響をおよぼした。

P 19

「登鶴鵲楼」王之涣

白日依山盡

黄河入海流

欲窮千里目

更上一層楼

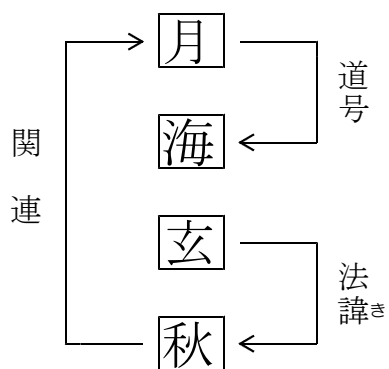
「早發白帝城」李白

朝辭白帝彩雲間

千里江陵一日還

兩岸猿聲啼不盡

輕舟已過萬重山



《成り立ち》

名の本体

秋

原始の形

一字一音一義

十系字^レ

玄

秋

同名を避ける

一族の団結を表す

十道号(字)^レ

月

海

玄

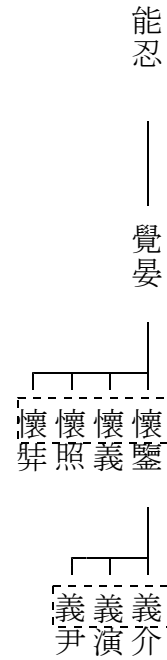
秋

本人をより限定する

参 玉村竹二「日本禅宗史論集」
諸橋轍次「名及び名實論」

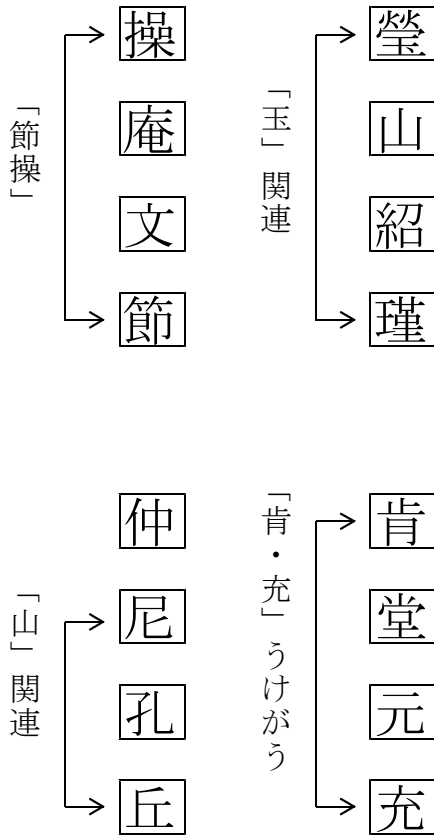
系字

系統を表す。本来は横の系列を表す。



道号

何れの時代も、名と関連のある文字を使用。



P 20

「秋浦歌」李白

白髮三千丈

緣愁似個長

不知明鏡裏

何處得秋霜

白髮三千丈、

愁いに縁つて個の似く長し

知らず 明鏡の裏

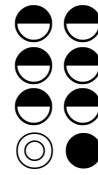
何れの処にか秋霜を得たる

瑩 玉の様に美しい石
瑾 質がかたい美玉

仲尼 ちゅうに 孔子の字 あざな
尼丘山 じきゅうざん 山東省曲阜県の東南にある。孔子の父母がこの山に祈つて孔子をうんだといわれる。そのため、孔子は名を丘、字を仲尼といった。

三、八字称

四字の対句、以後の総括（個人の行状の総括）



参	⇔	繡
西	⇔	東
來	⇔	魯
禪	⇔	卷

東魯の卷を繡き

全体、個々、全て対（読みも対に読む）

西來の禪に参ず

截流香象 ● 衝浪錦鱗 ○

截流の香象 衝浪の錦鱗

境界瀟洒 ● 心地清凉 ○

境界瀟洒にして 心地清凉たり

累功綿密 ● 種徳廣恢 ○

功を累めること綿密 徳を種うること廣恢

身重礼節 ● 心盡仁慈 ○

身は礼節を重んじ 心は仁慈を盡くす

〔序〕

八字称は古人の句を用いる。八字とも同一人の句は不可。

（佐藤泰舜禪師）

（新井石禪禪師）

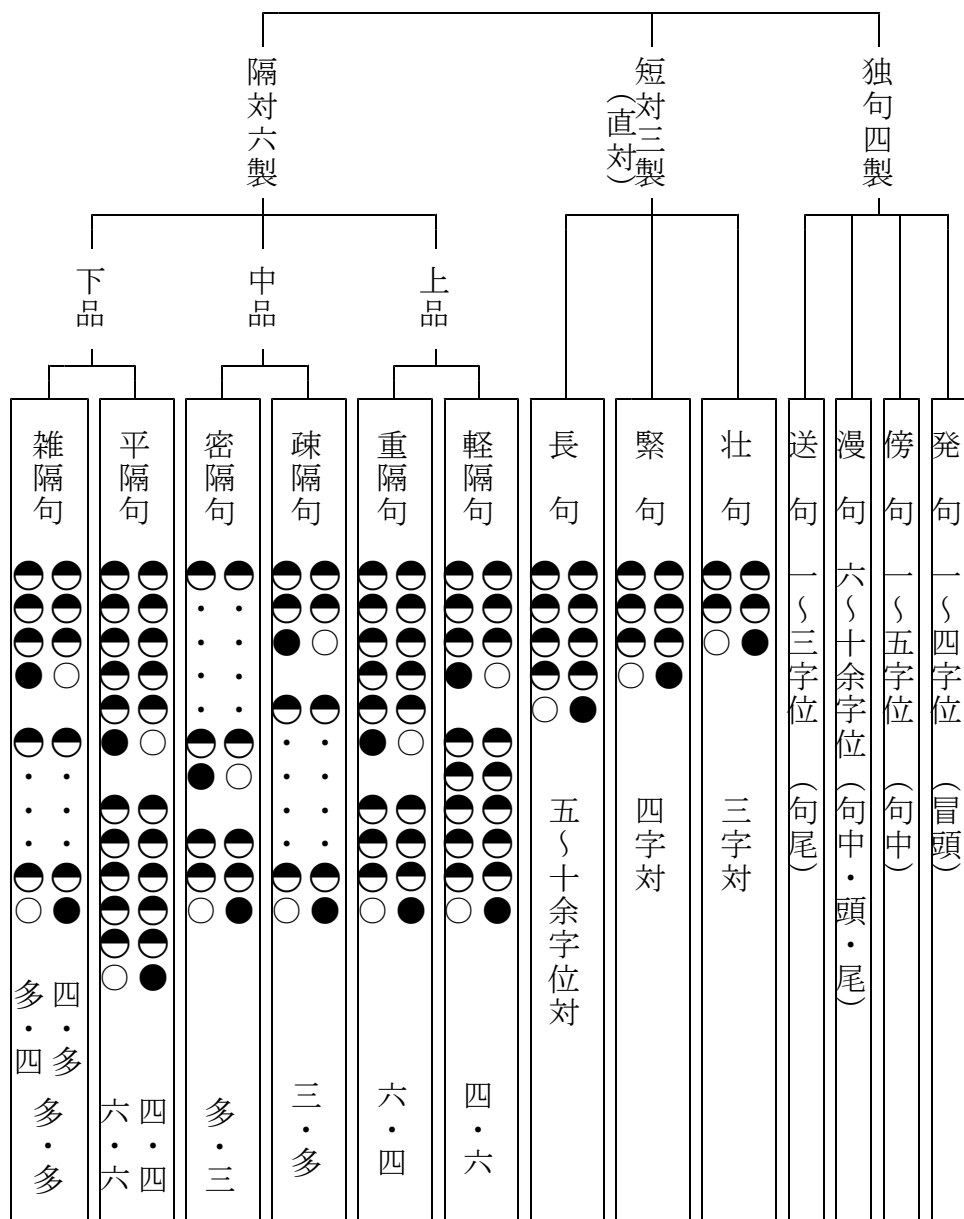
（日置默仙禪師）

《腹の例》

脚	一字関	腹								八字称		頌
		漫句	直対	傍句	直対	隔対	直対	隔対				
●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●	●	散文（末尾に韻◎）	●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●	到這裡	●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●	●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●	●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●	●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●	四六文の腹	●●●●●● ◎●	夫以某名	●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●◎●◎●
●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●	●	散文（末尾に韻◎をふむ）								散文の腹		
●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●	●	散文（末尾に韻◎）	●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●◎●		●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●◎●	●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●◎●	●●●●●●●● ●●●●●●●● ◎●◎●		古詩の腹			

参「四六文章図」卷五

四六十三法



參「四六文章圖」卷一

独句四製

発句

大抵は対無く、単独の句である。字数は一字から四字、冒頭に用いるので発句と云う。多くは例の通りであるが、これのみに限らない。自然に対となつて、短対、隔対の類を用いることもある。

夫以	夫れ そ 以 おも に みる	おもうに
原夫	原 たす に め 夫れ そ	もとにさかのぼつて考えるに
於是	是 こ に於て	そこで・この時にあたつて・このようになって
方今	方 ま に今	いま
竊以	竊 ひそ に以 か に	自分かつてにいえば。(私見などを述べる場合の謙遜)
伏以	伏て以に	つつしんで考えますに
蓋聞	蓋 けだ し聞く	聞くところ、聞いている
于時	時に	当時
伏観	伏て観る	つつしんで思いますに
以為(謂)	おもえらく	思うには。思うことには。
帰去来兮	帰りなんいざ	さあ、故郷に帰つてゆこう
汝當知	汝當に知るべし	知るべきである

【伏以〓伏惟】

上の者に対して自分の考えを述べる時にへりくだつて言う言葉

傍句

文の中でこれを用いる。この句も独句である。対を用いず、韻を用いず、一字から五字に至る。是等の字を句中に用いる時は皆傍句である。また、これらのみに限らない。

于粵	到這裡	於茲乎	蓋謂	蓋以	於越	就中	可謂	誠是	將又	是猶	是以	然則	然後	然而	斯廼
こ お い て	こ し や り に こ い て	こ し こ に こ い て	こ し こ も こ え ら く	こ し こ も こ え ら く	こ し こ に こ い て	こ し こ に こ い て	こ し こ に こ い て	こ し こ に こ い て	こ し こ に こ い て	こ し こ に こ い て	こ し こ に こ い て	こ し こ に こ い て	こ し こ に こ い て	こ し こ に こ い て	こ し こ に こ い て
こ こ に	こ こ の と こ ろ に な る と こ う な つ て は	こ こ に	こ こ の と こ ろ に な る と こ う な つ て は	こ こ に	こ こ の と こ ろ に な る と こ う な つ て は	こ こ に	こ こ の と こ ろ に な る と こ う な つ て は	こ こ に	こ こ の と こ ろ に な る と こ う な つ て は	こ こ に	こ こ の と こ ろ に な る と こ う な つ て は	こ こ に	こ こ の と こ ろ に な る と こ う な つ て は	こ こ に	こ こ の と こ ろ に な る と こ う な つ て は

【是以||是用】

遮莫 さもあらばあれ それはどうあろうとも

伏願 伏て願くは つつしんで願うに

伏請 伏て請ふ つつしんで請願するに

抑々 そもそも さていつたい・さてところで・それとも・あるいは

漫句

文の中でこれを用いるが、文の最初や終わりに用いることもある。六字より十餘字に至る独句をいう。対を用いず、韻を用いず、平仄も調えない。もし幸いにして韻が合うことがあってもかまわない。

上来・也 上来は・なり

冀其参学高流 冀は其れ参学の高流

送句

文の末尾に用いる。一字より三字に至り、対を用いず、韻を用いない。もし幸いにして韻が合うことがあってもかまわない。

而已 のみ 文末につけて限定の意をあらわす。それだけ。そればかり。

哉也 かな

孰甚焉 孰れか焉より甚らん

為之記 之の記を為る

之有 之れ有らん

何也 何ぞや

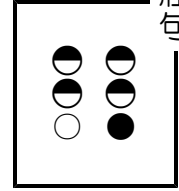
何哉 何ぞや

【而已】而・已それでやむ（やむ）の意。

已・耳・爾など一字で書くこともある。而已矣・而已焉・而已耳などと用いると、さらに強くなる。

短対三製

壯句



三字に限る。平仄を調え対を用いる。詩は三連を禁止する。文も三連を嫌うが、もしそうであってもかまわない。文には同字を用いてもかまわない。長篇の類は「平仄仄平」と用いるので、前後轉反して用いてもよい。

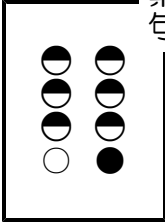
微霰^お零^ち
密雪^く下^たる

微霰^お零^ち
密雪^く下^たる

文^お有^ち流^り
學^お有^ち海^り

文に流有り
學に海有り

緊句



霰^{あら}れ

四字に限る。平仄を調え対を用いる。長篇の類は「平仄仄平」と用いるので、前後轉反して用いてもよい。

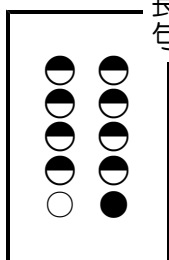
三陽交泰
●○●○●○
万彙敷榮

三陽泰を交わり
万彙榮を敷く

吉無不利
○●○●○●
危可使安

吉にして利せざることなく
あやう やすん
危きも安ぜしむべし

長句



五字より十二字に到り、平仄を調え対を用いる。十六、十七字に至るものもあるが、十二言以上は容易に書くべきではない。総じて文には上の字の平仄については、これを用いずともよい。

上方之三應
●○●○●○
東序之兩雄

上方の三應
東序の兩雄

露を^{うるお}
^{むかえ} 寒を迎^{きゅうろ}
て^ふ 舊廬を葺く

法歳の新時に逢て
山門の旧例を修む

雲、無心にして、岫しやうを出で
鳥、飛ぶに倦うんで、還かえることを知る

旌旗日暖かにして龍蛇動き
宮殿風微かにして燕雀高し

牌を午磬の已息いに携え
拂を昏鐘の荐鳴とに乗る

聖賢を黄卷の中に対すと雖も
焉れ龍象を緇衣の列に廁える

北斗天を周て、
めぐり
 玄冥の故節を送り
 東風地を拂て、
はらう
 青陽の飛蟲を出す
いた

葺ふく 廬ろ
米こめびつ
修理する

はたの総称
旌旗せいぎ

荐せんしきりに

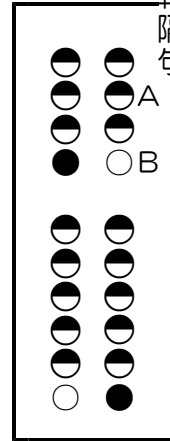
玄冥 冬の神

青陽
孟春

虫● 蟲○
 尾 東
 冬

隔対六製

輕隔句

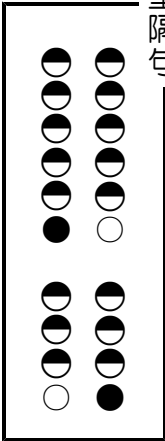


上は四字、下は六字、上品の句製である。

惠●日●之●光●
法●灯●之●照●
騰●百●代●而●弥●明●
至●七●葉●而●増●色●

惠日の光 七葉に至りて色を増す
法灯の照ひかり 百代に騰つとうて明らかに弥わたる

重隔句



肩の第二字（A）が平の時は、下の一字（B）は仄となる。又、肩の第二字が仄の時は、則ち下の一字は平となる。しかし、今は肩の第二字の平仄を調えない。下の一字のみ平仄を調べて、上は皆平仄を問わない。後に出てくる五種の句もこれと同じである。

灯○ 燈○
青 蒸

上は六字、下は四字、上品の句製である。
この句、上は皆平仄を調えないこと軽隔句に同じ。

光○輝○
彩○媚○
煥○窈○
發○窕○
照○無○
人○類○

光輝煥發して人を照す
太真が媚
嫵媚窈窕、類無し
西子が手

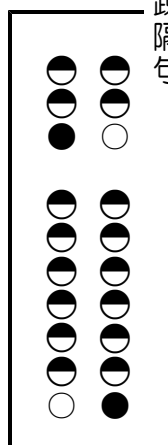
又

欠○積○
葱○夢○
嶺○窓○
万○三○
里○餘○
遊○暇○

葱嶺万里の遊を欠き
還て梵策を執る
夢窓三餘の暇を積み
猶を漢篇を諳じ

還○猶○
執○諳○
梵○漢○
策○篇○

疎隔句



上は三字、下は何字でもよい。五、六、七、八、九字であつてもよい。
中品の句製である。

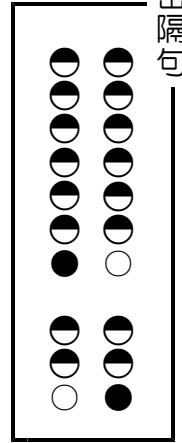
山○水○
後○前○
山○水○

山後の山
水前の水
誰か碧潭の波を染め出し
何ぞ青岩の石を削り成さん

何○誰○
削○染○
成○出○
青○碧○
岩○潭○
之○之○
石○波○

嫵媚…あでやかで美しいさま
窈窕…上品、しとやか
窻…軽率、挑む
窻…しとやか、深い
煥發…輝き現れる
三餘…勉強すべき三つの余暇
葱嶺…パミール高原一帯
葱嶺教…仏教
梵夾（策）…梵経

密隔句



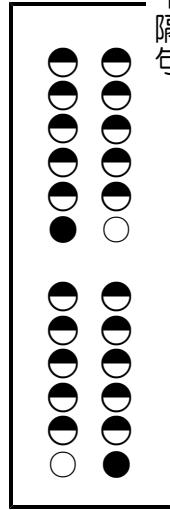
上は七字、或いは何字でもよい。下は三字。上は五、六、七、八、九であつてもよい。中品の句製である。

念●遊●樂●之●尊●一●夜●
催○勾○曲○之○會○三○春○

山○月○圓○
野●花●落●

遊樂の尊を念ずる一夜 山月圓なり
勾曲の會を催す三春 野花落つ

平隔句



上は四字、下は四字。上は六字、下は六字。上も多少不定、下も多少不定。上句と下句と、字数が同じ句製である。

聞○鷄○聲○於○苑○店○
見○漁○火○於○楓○橋○

緬○想○人○跡○履○霜○
徒○諳○客○船○泊○月○

鷄聲を苑店に聞き
漁火を楓橋に見て

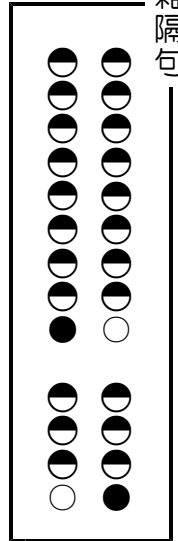
緬かに人跡の霜に履むを想い
徒に客船の月に泊るを諳ず

聞●聞○

聞 文

聞 聞く

聞こえる



二説あつて、一説に上は四字、下は五字七字八字九字十字十一字十二字。又、上は五字七字八九十一、十二字、下は四字。下品の句製と云う。一説には、上も四字自り十二字、下も四字自り十二字で、四六、六四の句を除き、平分の句を除いて、上も多少不定、下も多少不定と云う。

●太●祖●停●車●定●江●南●之●策●
●小●杜●題●詩●憶●水●西●之●遊●
○花○期○三○日○

太祖車を停て江南の策を定め 雪連宵に晴れ
小杜詩を題て水西の遊を憶い 花三日に期す

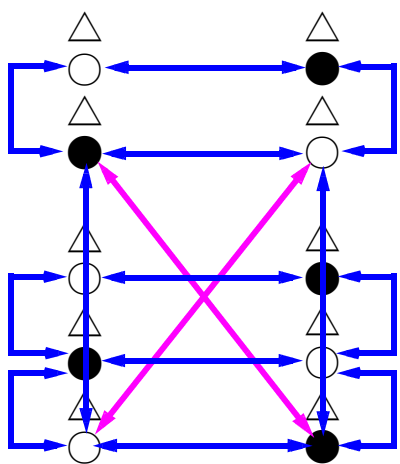
直対も隔対も『仄平平仄』と用いる。又、『平仄仄平』と用いる。轉反して平仄を用いてもかまわない。

句製十三法の外に、獨句の中に過句と云うのがある。十餘字より二十三十字を数える。經典の本文を引くものか、漫句のこと云うのか不明である。又、一説に啓札の句法、肇順序等の名と云う。結句の名であらうか。

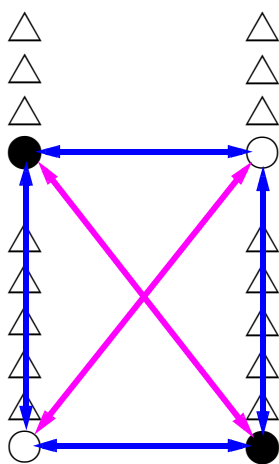
平分…等分、均等

小杜…杜牧

(大杜、老杜||杜甫)



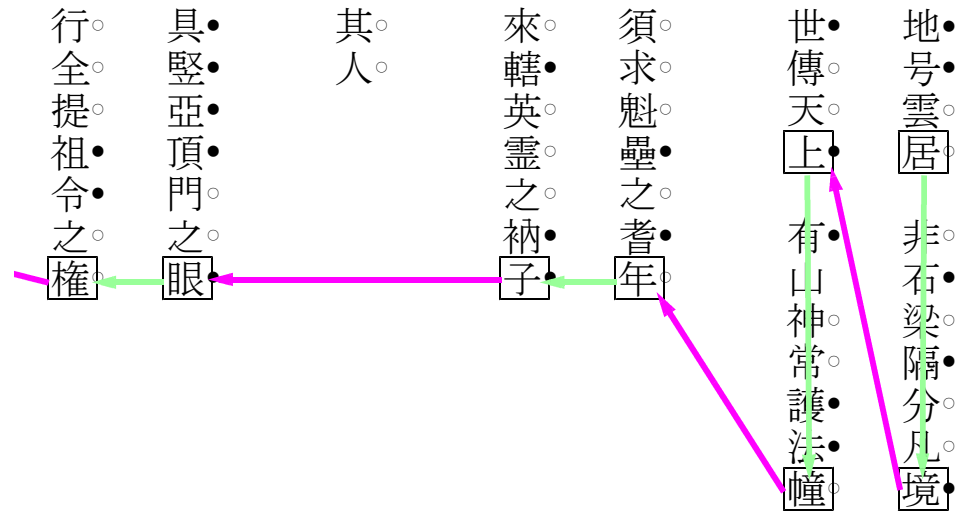
四六文本来の基本的な平仄法（一例）



禪門四六文の基本的な平仄法

疏の四六文の基本的な平仄法

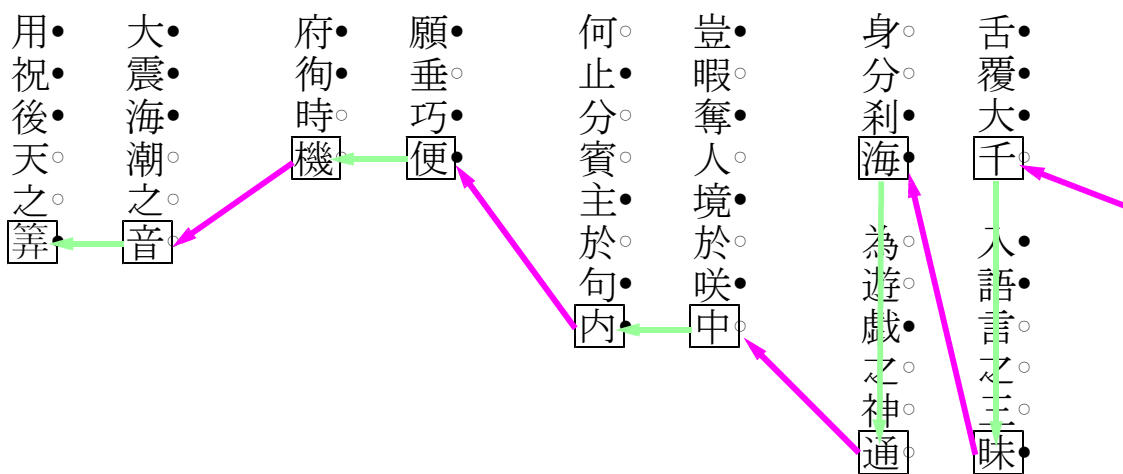
圓悟住雲居

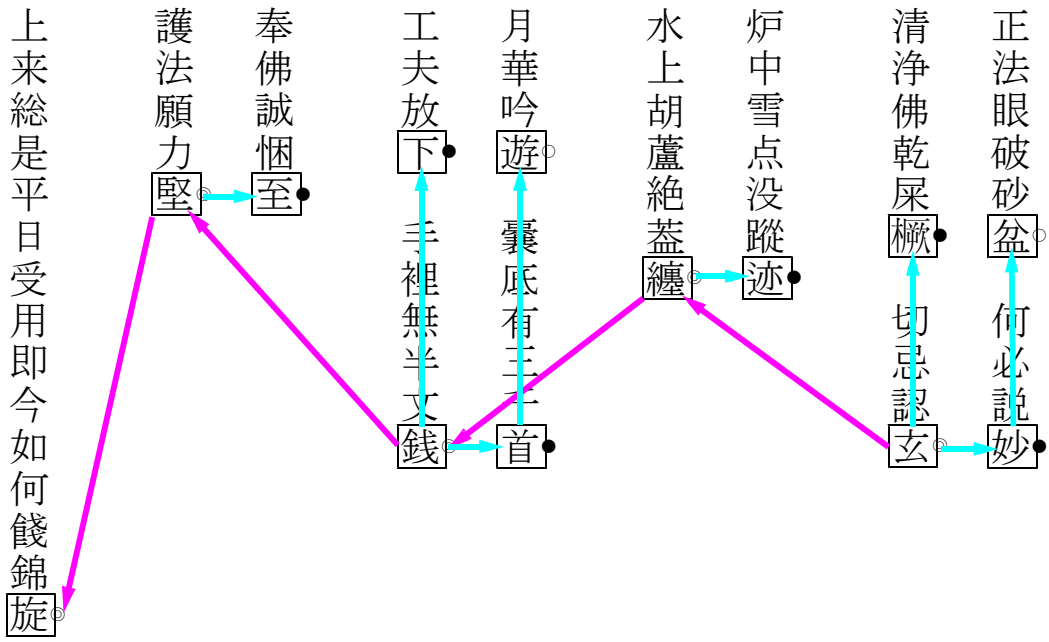


参 『禪儀外文集』(一三四二)

虎關師鍊(一二七八〜一三四六)

※疏は脚韻を踏まない





高祖承陽大師五百五十回大遠忌疏

淨法界身 本無出沒 大悲願力 示現去來

仰冀真慈 伏垂照鑑

大日本國北陸道越前州吉田郡志比莊吉祥山永平寺法孫比丘即中

維時享和二年八月廿八日 值吾高祖大師五百五十之遠諱

預迎 真儀於演法堂 嚴備香華灯燭蘋繁菓茗 不腆之供因率湖海之雲仍

恭就真前 旋遶看讀大乘真詮安樂行品 所鳩殊勲 以酬慈恩之罔極者也

右伏惟

靡斥佛魔 發今古未發之口

屈伸海嶽 展賢聖不展之拳

何啻得天童瀉瓶之名

元自有佛樹充閭之記

正法眼豁 永與日月爭明

單傳曲高 寧將宮商同韻

故非今者之所是

實易昔人之所難

屢辭紫袍寵光 無慙楷祖

重却朱璽官秩 有光淨翁

適際五百五十諱辰

爰修一七夜白煙祀

君蒿悽愴 勿拒葵霍之愀

靈鑑照臨 尚享黍稷之饌 謹疏

八月廿八日 遠孫嗣祖比丘即中 謹疏

高祖承陽大師七百五十回大遠忌疏

淨法界身本無出沒大悲願力示現去來
仰冀真慈府垂照鑑

日本国福井県吉田郡吉祥山永平寺住持法孫比丘奕保

山門今月今日恭相值高祖承陽大師永平道元大和尚七百五十回大遠忌之辰

虔備香華燈燭山蔬野茗之微供謹而集現前清衆以伸如在懇懃之法供養所鳩殊勲
上酬無極之慈恩者也

右伏惟

澆末願生。稟躬洛南久我。

重瞳寧馨。通詩經現才知。

其初

捨華胄權門身。髮斷比叡。

讀破佛書經籍。尚有團疑。

雖參學諸方無得本來法性意。

求法難留越海渡宋国謁正師。

從是

朝參暮請。修文字弁道故實。

開單展鉢。倣佛佛祖祖要機。

天童山上月玲瓏。身心脫落本証轉。

脫落身心只管坐。淨翁垂誨開雙眉。

於此。眼睛豁然贏得永劫生死流轉一大事因緣喪一時

空手還鄉。故一毫無佛法。

本証妙修。著普勸坐禪儀。

隨勸

開闢永平寺。舉揚正法。

示不離叢林。立僧堂規。

佛印東傳。五百年間出聖。

後昆齊仰。佛法僧中古錐。

伏冀

大寂定中。法燈赫奕長輝扶桑。

半杓遺訓。殘涓入流永垂慈悲。謹疏

開祖炳鑑慈悲容納維時平成十四年九月二十九日

永平法孫比丘奕保 謹疏

脚	一字関	腹									八字称		頌
		漫句	隔対	直対	傍句	隔対	直対	隔対	直対	隔対			
	●	散文（末尾に◎）			到這裡							夫以某名	
	●	散文（末尾に◎）			到這裡							夫以某名	
	●	散文（末尾に◎）			到這裡							夫以某名	
	●	散文（末尾に◎）										夫以某名	

腹のきまり

- ① 隔対直対を用いて韻を踏む。
- ② 韻は頌と同韻。
- ③ 八字称は緊句（長句）を用い、本人を総括する。
秦鎖龕にはつけず、起龕から入れる。
- ④ 隔対直対の数は意に任す。
- ⑤ 散文は二十字から三十字、一様でない。
 腹尾に韻を用いる。
- ⑦ 下炬（秉炬）の五要
 一に徳（故人の徳）、二に死（亡くなったこと）、三に哀（哀悼の意）、
 四に活（生前の功・消息）、五に奠（お供え、お祀り）。
- ⑧ 奠湯奠茶
 それぞれ湯茶の縁語を述べる。
- ⑨ 鎖龕の二用
 一に放行、二に把住。全体を二段に分けて、先ず放行、後に把住。
- ⑩ 鎖龕の三法
 一に仁（故人の徳）、二に死（亡くなったこと）、三に活（生前の功）、
 この外に静意を加える。
- ⑪ 起龕の二用
 一に把住、二に放行。全体を二段に分けて、先ず把住、後に放行。
- ⑫ 起龕の三法
 一に仁、二に死、三に活、この外に動意を加える。
- ⑬ 秉炬法語を始めとして、諸法語はみな前出の形による。

秦

脇導師の法語は正式には頌腹脚があつてよいが、秉炬を引き立てる関係もあつて、腹も短く、大抵は絶句の頌ぐらいが多い。
 奠湯奠茶は頌に短い漫句、それに脚ぐらいが適當である。
 「恭惟・大和尚」もいらない。

【放行】 向下。
 【把住】 〓 把定。向上。

下炬異格

先ず韻を踏まず乱句或いは散文等、八字称より韻を用いる。その時は末に又頌有り。次に落句、次に喝一喝。或いは又落句無しで一喝有り。一様ならず。

四六文の特徴

- 一、四六
四字句と六字句を多用するが、四字句と六字句との関係は対等ではなく、四字句が美文の基本で、六字句はそれに變化をあたえる役目。
- 二、対偶（対句）
隔句対は単対よりこつたものとされる。特に、「上四字、下六字」は理想的な対偶。
- 三、声律
秩序だった平声と仄声の配置。
- 四、典故
字句に過去の話柄を重ねて、文意を重層化する
- 五、鍊字
美感を伴う字句や平凡でない字句を用いる。

対句の要件

- 一、色に對しては色
- 二、數に對しては數
- 三、名詞を實字と云い、實字は實字に對應する
- 四、動詞助動詞を虚字と云い、虚字は虚字に對應する
- 五、形容詞は形容詞に對應する
- 六、平字に對しては仄字が對應する
- 七、文法構造が同じ

參 六朝美文学序説

參 「文鏡秘府論」

雲門の一字関

雲門 文偃は修行者に対し、常に簡潔な一字でもって示したので、雲門の一字関と云われる。

露^ろ あらわす、あらわれる

喝^{かつ} 前意をひっくりかえす

咦^い 面白いなあ、可笑いぞ

咄^{とつ} 叱りとばす、前言をたたきつける

参^{さん} 参究せよ、参得せよ

看^{かん} 全身心で見よ

響^{きやう} それ見ろ

関^{かん} 関門、さあどうだ通れるか

言い方に注意

喝 「カア」と放つ
露 「ロオ」オツ」と把まえる

〔秦〕 脇導師は多くの場合一字関を遠慮した方が良い。（詩偈作法）

六、脚

- ① 韻を用いる。脚は必ず古徳の語皆着語の類を用いる。
 ② 頌と脚の詩式は別々でもよい。
 (例) 頌が五言で脚が七言。
 ③ 頌と脚とは別趣がよい。
 (例) 頌が情なら脚が景、頌が情景なら脚が宗乗。
 ④ 直対、または絶句の転結の二句を用いる。

如何弁異同 (一東)

昨夜金鳥飛入海
今朝依舊一輪紅

如何が異同を弁せん

昨夜金鳥飛んで海に入り
今朝舊に依て一輪紅なり

如何接高容 (二冬)

千古松聲來有韻
萬年谿水去無蹤

如何が高容に接せん

千古の松聲、來りて韻有り
萬年の谿水、去りて蹤無し

作麼生拜麗眉 (四支)

行到水窮處
坐看雲起時

作麼生か麗眉を拜せん

行いては到る水の窮まる處
坐しては看る雲の起こる時

何以論是非 (五微)

掬水月在手
弄花香滿衣

何を以てか是非を論ぜん

水を掬すれば月手に在り
花を弄すれば香衣に満つ

〔虚堂録 卷中〕

參 禪林句集

【如何】

- ① 状態や処置を問うことば。
 どうであるか。
 ② 反問の意をあらわすことば。
 どうして。なんだって。
 ③ 問いつめる意をあらわす
 ことば。どういうわけだ。

【何以】

- ① どうして。どういう訳で。
 ② 何によって。

更通消息来（十灰）

青山元不動

浮雲任去来

更に消息を通じ来れ

青山元動ぜず

浮雲去来に任す

〔五燈會元 卷四〕

一句附陳（十一真）

清淨深探得

花還世上塵

一句附陳せん

清淨も深く探り得ば

〔良寛詩集〕

以何報恩（十三元）

扶過斷橋水

伴帰無月村

何を以てか恩に報いん

扶けては過ぐ断橋の水

〔無門關第四十四則〕

如何涉言詮（一先）

水流元入海

月落不離天

如何が言詮に涉らん

水流れて元海に入り

〔五燈會元 卷十六〕

轉斗杓（二蕭）

白雲留不住

依舊出青霄

斗杓を轉ぜん

白雲留むれども住せず

〔劫外録〕

又且論評（八庚）

花依愛惜落

草逐棄嫌生

又た且つ論評せん

花は愛惜に依て落ち

〔永平廣録 卷一〕

頌

【A】

幻化空身即法身
現前當體本來人
知君三伏厭炎暑
去赴涅槃無熱津

【B】

浮雲起滅在風前
幻化空身四十年
江上曲終人不見
白鷗湮沒水連天

【C】

碧落無雲天似洗
靈光一色照無邊
孤圓心月輝今古
法性海中影隨緣

恭惟
(戒名)

頌

八字称

八字称

【D】

性是淳直 德自完全

【E】

避邪彰正 無假歸真

【F】

繡東魯卷 參西來禪

腹

【G】

或死或生 起居安住戒定慧
或生或死 動靜離却癡貪瞋
鑊湯爐炭清涼境
劒樹刀山脚下塵
屋後松風 本分田地
山頭發月 自己家珍
朝露吹散 槿花香寂寂
月潭影圓 溪水粼粼

【H】

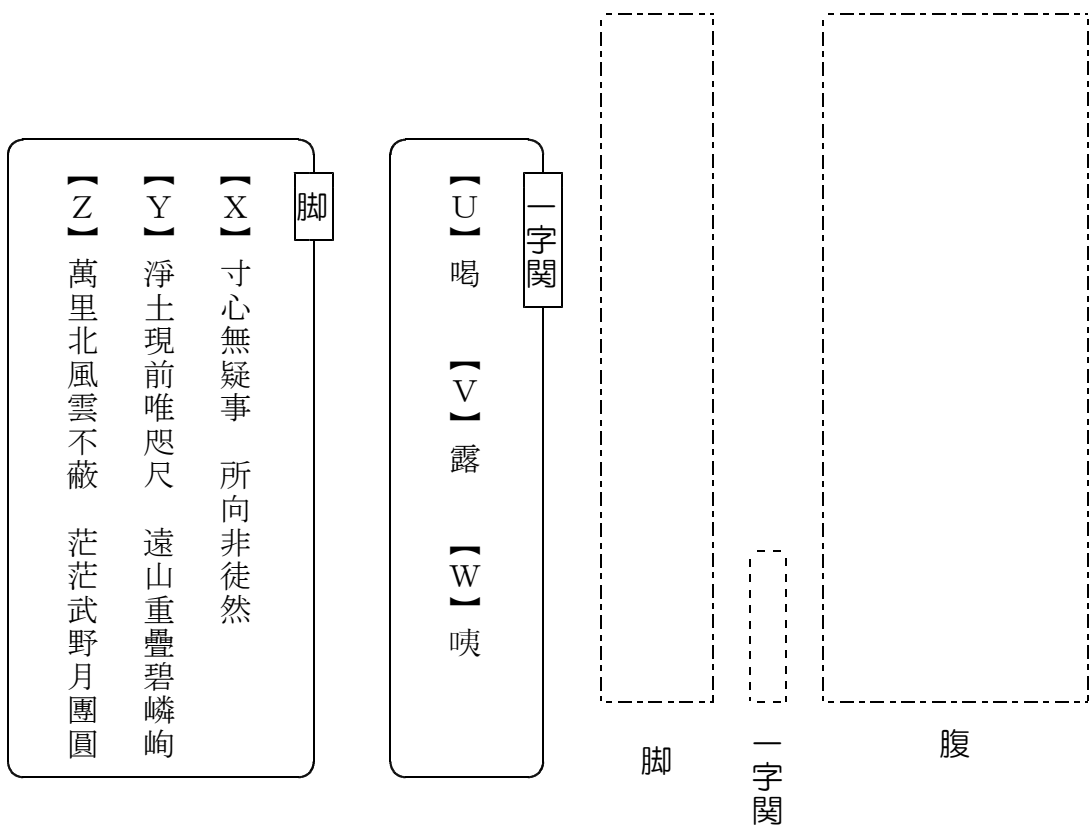
月華吟遊 囊底有三千首
工夫放下 手裡無半文錢

【I】

乳酪酥煎 媒趙州茶味淡
米粟穀製 越雲門胡餅禪

【J】

齊家財如陵阜 不私其富



【T】 然則	【S】 可謂	【R】 到這裡	【Q】 此是居士一生妙術末後實相 醍醐甘味如何喫去 老衲爲居士 著一鞭	【P】 如上閑絡索乃且置 一超直入如來地端的會麼 山僧爲通一機去	【O】 上來總是平日受用 即今如何餞錦旋	【N】 受用不盡 能脫結纏	【M】 奉佛誠悃至 護法願力堅	【L】 炉中雪点没蹤迹 水上胡蘆絕蓋纏	【K】 正法眼破砂盆 何必說妙 清淨佛乾屎瀘 切忌認玄	調心仁及童僕 遂退其權
--------	--------	---------	---	--	-------------------------	---------------	-----------------	------------------------	--------------------------------	-------------

七、詩の八病（参考）

詩（五言）を作る上で避けなければならないとされる八つの忌みごと。梁の沈約が定めた。

（一）平頭

五言詩の第一字と第六字が同声（四声が同じ）であってはならない。第二字と第七字も同様。

今日良宴会

飲楽難具陳

今日良宴会
飲楽具さに陳べ難し

前句の第一字「今」と第六字（後句の第一字）「飲」は共に平声。第二字の「日」と第七字（後句の第二字）「楽」は共に入声。

（二）上尾

五言詩の第五字と第十字が同声であってはならない。

西北有高樓

上與浮雲齊

西北到高樓有り
上は浮雲と齊し

「樓」と「齊」は共に平声。

（三）蜂腰

五言詩の一句の中で、第二字と第五字が同声であってはならない。

聞君愛我甘

竊獨自彫飾

君の我が甘き愛するを聞き
竊かに獨り自ら彫飾す

「君」と「甘」は共に平声。「獨」と「飾」は共に入声。

（四）鶴膝

五言詩の第五字と第十五字が同声であってはならない。

客從遠方來

遺我一書札

客遠方從り來たり
我一書札を遺る

參 「文鏡秘府論」 空海

上言長相**思** 上に言ふ 長く相い思うと
下言久離別 下に言ふ 久しく離別すと

「來」と「思」は、共に平声。

(五) **大韻** だいいん 一韻二句において、韻字と同じ韻の字を用いてはならない。

紫翮拂花樹 紫翮 かく 花樹を拂ひ

黄鸝閑綠枝 黄鸝 り 綠枝に閑たり

「鸝」は「枝」(韻字)と五支で同韻。

(六) **小韻** 本韻を除き、九字の中に同韻の字を用いてはならない。

簾簾出戸望 簾 すたれ を擧 かか げて戸を出でて望めば

霜花朝養日 霜花 朝 あした に日 ただよ に養ふ

「望」と「養」は共に去声二十三漾の同韻。

(七) **傍紐** ぼうちゆう 一句において声母を同じくする字を用いてはならない。

魚遊見風月 魚遊びて風月を見

獸走畏傷蹄 獸走りて傷蹄を畏る

「魚yù」と「月yuè」は共に声母[y]が同じ。

「獸shòu」と「傷shāng」は共に声母[sh]が同じ。

(八) **正紐** せいちゆう 二句において声母と韻母を同じくする字を用いてはならない。

(同一の紐に属する字を用いてはならない)

我本漢家女 我れ本と漢家の女

來嫁单于庭 來嫁 单于の庭

「家jiā」と「嫁jià」は共に声母[j]と韻母[ia]が同じ。

【紐】声母の別称で漢字の音節の発声の子音のこと。

また、声母と韻母が同じで平上去入の順に連なる四字一組の文字のこと。

五言絶句の拗体

変格仄起式（起句押韻）

起句	承句	轉句	結句
▲●	△○	△○	▲●
●●	○●	▲●	●●
○●	●●	○●	○●
○●	○●	○●	○●

側体仄起式（仄韻押韻）

起句	承句	轉句	結句
▲●	△○	△○	▲●
●●	○●	▲●	●●
○●	●●	○●	○●
○●	○●	○●	○●

側体仄起式（仄韻起句押韻）

起句	承句	轉句	結句
▲●	△○	△○	▲●
●●	○●	▲●	●●
○●	●●	○●	○●
○●	○●	○●	○●

変格平起式（起句押韻）

起句	承句	轉句	結句
△○	▲●	▲●	△○
○●	●●	●●	○●
○●	○●	○●	○●
○●	○●	○●	○●

側体平起式（仄韻押韻）

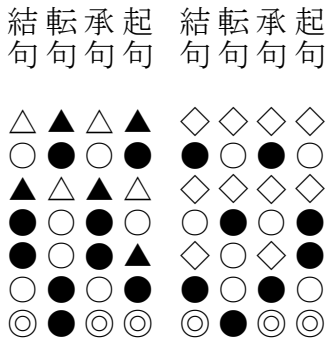
起句	承句	轉句	結句
△○	▲●	▲●	△○
○●	●●	●●	○●
○●	○●	○●	○●
○●	○●	○●	○●

側体平起式（仄韻起句押韻）

起句	承句	轉句	結句
△○	▲●	▲●	△○
○●	●●	●●	○●
○●	○●	○●	○●
○●	○●	○●	○●

七言絶句の拗体

拗体（不粘格）

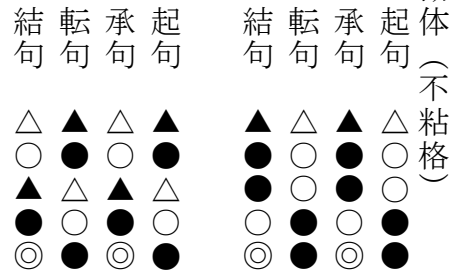


平起式の平仄法

仄起式の平仄法

仄起式の平仄法

平起式の平仄法



拗体（不粘格）

平起式の平仄法

仄起式の平仄法

仄起式の平仄法

平起式の平仄法

その他

挟み平

① 転句の下三字○●●を●○●とする。

第五字(平)と第六字(仄)とを転換するもの。

② 転句の下三字を●○●とし結句の下三字を○●○として相對立させる。

転句の第五字(平)と結句の第五字(仄)とを転換するもの。

③ 「挟み平の孤平は許される」

転句で「●○○●●」を挟み平に変更した事に依って「●○○●●」となり、結果として二文字目が孤平になるが、特例として孤平は許される。

押落

④ 七言絶句で、起・承の二句を対句とした場合、起句の押落を常則とする。

拗救

⑤ 拗救(ねじれの調整)

七言絶句平起式を例にすると、

基本的な平仄配置

起句	○	○	●	●	○	○
承句	●	●	○	○	●	○

変更可能な部分

起句	△	○	▲	●	○	○
承句	▲	○	△	●	○	○

参

漢語詩律学 第八節
【拗】ねじる・ねじれる

・一句の中で調整する
変更可能な部分(△▲)で、本来平字であるべき所を仄字にした場合
仄文字で有るべき所を平文字にして調整する。

夜○鐘○殘○月○雁○歸○聲○

(高適)

同○作○逐○臣○君○更○遠○

(劉長卿)

江○上○女○兒○全○勝○花○

(王昌齡)

・二句の中で調整する
一句中で処理できない時は二句の中で調整する。

甕○頭○竹○葉○經○春○熟○

(白居易)

階○底○薔○薇○入○夏○開○

・一句の中で調整し、なお二句の中でも調整する

樓○上○鳳○皇○飛○去○後○

(王建)

白○雲○紅○葉○屬○山○雞○

九、連声 れんじょう

二つの音が連続する時、前の音節の末尾の音（ん・つ・ちで表される漢字）が、後の音節の頭母音（又は半母音+母音）に影響して、後の音の前に前の子音をもう一度重ねる変化をすること。

三 sam 天 ten 観 kwan 中世以前の発音 ☑			前尾の音節
m + a~o ma~o	n + wa~o na~o	n + a~o na~o	前+後の音節
嶮悪 けむ+あく↓けむまく↓けんまく↓剣幕	安穩 因縁 禅苑 輪廻 眼横 歎異抄 監院 仁和寺 看話 あん+をん↓あんのん いん+ゑん↓いんねん ぜん+ゑん↓ぜんねん りん+ゑん↓りんねん がん+わう↓がんのう たん+ゐん↓たんにん かん+ゐん↓かんにん にかん+わ↓にかな	四天王 梵音 観音 感應 万葉 銀杏 てん+わう↓てんのう ぼん+おん↓ぼんのん くわん+おん↓くわんのん かん+おう↓かんのう まん+えふ↓まんのう ぎん+あん↓ぎんなん	例

※中世特に鎌倉時代から室町時代にかけて一般化し、近世の江戸時代以降になるとほとんど見られない。

屈 kut 雪 shet チ・ツ		陰 wom	
t + wa~o ta~o	t + a~o ta~o	m + wa~o ma~o	m + ya~o ma~o
屈 説話 く せ つ + わ く ↓ せ つ た く ↓ 屈託	一 佛 佛 雪 音 恩 印 隠 い ぶ ぶ せ ち + つ + い お お ん ん ↓ ぶ せ ん ↓ つ ち ん い ぶ ぶ っ と ち ん	三位 さ む + ゐ る ↓ さ む み ↓ さ ん み	陰陽師 お む + や う ↓ お む み や う ↓ お ん み よ う

漢語と助詞との間の連声（室町期）

念仏を ↓ ねんぶつと （but + wo）

図作佛 ↓ さぶつと

垂照鑑 ↓ しょうかんの

所集殊勲 ↓ しゅくんな

十、連濁

語と語が接続するときに、後の語の最初の音が清音から濁音にかわることを音読の場合、連濁が起こるのは鼻音（m、n、ng）の次にくる語である。

日本国	↓	にほん(n)ごく
山僧	↓	さん(n)ぞう
晋山	↓	しん(n)ざん
天智天皇	↓	てん(n)ちてんのう
三国	↓	さん(m)ごく
明星	↓	みょう(n)じょう
行者	↓	あん(n)じゃ

時代が新しくなると、連声と同じように、連濁の習慣がなくなっていた。

両国	↓	りょう(n)ごく(地名)
両国	↓	りょうごく(日米ー)
香水	↓	こう(n)ずい(諸種の香を入れて作った、仏前に供える水)
香水	↓	こうすい(化粧品)
三階	↓	さん(n)がいさんかい

十一、参考文献（作詩関連書籍）の紹介

辞書	大漢和辞典	諸橋轍次	大修館書店	中文
	漢語大詞典	小川環樹	商務印書館	
漢詩作法	新字源	石川忠久	角川書店	
	福武漢和辞典	田辺松坡	福武書店	
	平仄便覧	林古溪	明治書院	
	平仄字典	岩垂憲徳	富山房	
	韻字索引	駒澤大學	大修館書店	
	禅学大辞典	佐橋法龍	思文閣出版	
	禅語小辞典	古賀英彦	森江書店	
	禅語辞典	中川洪庵	柏美術出版	韻別
	禅語字彙	飯田利行	国書刊行会	
	禅林用語辞典（平仄付）	飯田利行	続群書類従完成会	
	禅林名句辞典	市木武雄	東京寶文館	
	五山文学用語辞典	池田四郎次郎	臨江詩閣	類別詩語集 現代語訳
	漢詩講座	三浦梅園		漢文
	詩轍	森槐南		
漢詩の掬体	作詩法講話	田辺松坡		
	作詩問答	田辺松坡		
	作詩訣	田辺松坡		
	作詩階梯暨詩話	田辺松坡		
	詩家推敲	大典顯常	豊友社	助字 字義
	作詩詞論登攀先賢諸家作詩詞論集説	岡竹山		
	文鏡秘府論	空海		
	文鏡秘府論考	小西甚一	大日本雄弁会講談社	
	詩律兆	中井竹山		漢文
	全唐聲律論	谷立憲		漢文

古詩	四六文														
	伊仲芳四六之法	仲方圓伊													漢文
	天隱和尚四六図	天隱龍澤													漢文
	文章源流	雪心素隱													漢文
	四六彙解														漢文
	四六文章図	大典顯常													漢文
	文海知津	佐佐豐明													漢文
	四六文鑑	千丈實巖													漢文
	駢文史序説	鈴木虎雄													
	賦史大要	鈴木虎雄													
	支那詩論史	鈴木虎雄													
	支那文学研究	鈴木虎雄													
	支那文学概説	青木正児													
	吉川幸次郎全集一、二	吉川幸次郎													
	中国詩歌原論	松浦友久													
	五山文学新集	玉村竹二													
	五山文学史稿	北村澤吉													
	駢文学	張仁青													中文
	漢語詩律学	王力													中文
	六朝麗指	古田敬一													
	中国文学における対句と対句論	古田敬一													
	六朝美文学序説	福井佳夫													
	中国散文論	吉川幸次郎													
	蒲室集	笑隱大新													
	疏藁														
	幽谷餘韻	千丈實巖													
	古詩韻範	武元登登庵													漢文
	古體詩序説	大野實之助													漢文
	古詩平仄論	森槐南													漢文

[illegible]